

大化改新に於ける反蘇我勢力の構造

新野直吉

初めに

大化改新が上古史上に占める意味は今更こと新しく云ふまでもない。それだけに、もうとりたてて研究すべきことなどは何も残つてゐない程研究されてもゐる。一見その様に研究し尽されてゐる様ではあるが、しかし、その改新遂行勢力の性格や構成が如何なるものであるかといふ問題は、必ずしも研究・理解の充分でないことがらの一つであると思ふ。爰に私は、その點に就いていささか所見をのべて見ようとするのである。

一、蘇我勢力微弱論によせて

大化改新が皇極天皇四年に、当時の最大勢力蘇我氏を倒すことによつて断行の口火が切られたこ

とは、著明な事實である。この故にこそ、世に聖徳太子の政治理念の直接的顯現を大化改新に見ようとする立場に対し、批判して、太子の政治と大化の政治の違ひを主張するに當つて、^註津田博士はこのことを重視されたのである。

勿論一方には、道順やゝもすれば大化改新を過小に評價することを楽しむ風潮があつて、人々の中には、改新は旧制と尋常的であるとか、皇國史觀の場^に立つ人々が、幕末以来過大に宣伝し、爲にする解説をしたのだとか、などゝの説をなす向きがあり、大化改新そのものの史的意味が微小化されると共に、私がこゝにとりあげようとするものゝ直接対象たる「蘇我氏」も、皇室尊重といふ教訓上の必要に於いてデツチあげられた板空大

勢力で、實際は小勢力にすぎなかったとする説²なども出てゐる時、敢へてこの様な問題について日頃考へる処を明らかにするのは、学向は流行ではないと信じてゐるからである。

大化改新の先駆となるものとして、聖徳太子の政治のみを重くみる立場に賛成出来ないことは、私³もかねて所見をのべたことがあるし、同じ意味で、大化改新に至る過程に對外的關係からの漸進的影響を見逃し得ないことも、私見⁴を表明したことがある。それ故道⁵頃思師曾伏部博士が発言されたことなどは、我々日本古代史の学徒にとつて誠に傾聴すべき警告であり、私なども十年前博士の講筵の末席を汚してゐた時から肝に銘じてゐたのである。

けれども大化改新小事件論者の考える様に、不当に改新を小さく見ることは出来ない。改新無しに、氏族古代の正史の進展をなるがまゝに放置してゐて、果して日本律令國家の成立が自然發展的に出来たか否かといふことになる、私は全く懷疑である。そして蘇我氏の力が弱小だったとす

ることなどは、書紀の所述を全面否定しようとしてもする無謀や、先学諸賢の多年の研究を総べて無視すると云ふ暴挙でも冒さぬかぎりは、所詮成り立ち得ないことである。確かに書紀の史料価値には限界もあらう。だが、人々が書紀の記述を否定しようとする際に、各自の見解を樹てるために使用する知識も、書紀或ひは書紀の肯定的な研究の結果なるものに負ふこと甚だ多大なのであつて、書紀そのものを無視したり、それを史料とすることを全く誤りとするが如き立場に、私は與することが出来ないのである。

記紀などによると上古の朝廷は、皇室のもとに、豪族が中核となつて構成してゐた。このことは、社會の發展段階にのつとつて、我國の上古史に注目する人々の研究に於いても、合理性あることとゞされてゐるのだから、どの面から見ても確實としてよいのであらうが、その豪族にちの動きを見ると、葛城・平群時代、大伴・物部時代、そして物部・蘇我時代といふ路筋が、見て取れるのである。「臣」の姓を持つ葛城・平群などは、「

大和の最有力の地方豪族であるとするのは、井上助教の説であるが、いはゆる皇別に属する彼らは、徳川幕府下の親藩か、松平氏を称した外様大名かを、思ひ合せることの出来る発生をなした存在だと思へる。それに対し大伴・物部などは、譜系大名が旗本にあたる皇孫直隸の部将であつたことは、彼らの職掌から明らかである。それが勢力を強めたのは、大和國家の拡大過程に於ける武力の意味を見ればうなづけることである。そしてこの様な性格の異なる氏族の政局上に於ける隆替は、あたかも徳川幕府のさきがけたる豊臣政権において、前者的な五大老と、へ勿論豊臣に譜系はないが、後者的な五奉行との持った意味や、更に時代が流れて徳川幕府の完成後に、後者的（即ち同時に豊臣の五奉行的）譜系者たちが閥老を占めた幕閣のありさまを見るならば、一つの政权の成立発達過程において、政局担当者の持つべき方向と云ふものが、相似性を以て浮かんで来るではなからうか。

かく見て来るならば蘇我氏は、甚だ危険な比較

ではあるが、強いて云へば江戸幕府における柳澤田沼の類の出身と通ずる場を以て、政界に登場したのではあるまいか。葛城氏の後を伝へる彼の氏であるから、或いは然るべき蘇我氏の流ではあつたらうけれども、当初からの彼の氏はその氏族の尊貴の故を以て、葛城・平群など、並び称せられたことの無かつたのは明瞭であるし、また大伴・物部の如き軍事的勢力も古くよりの神祕的部将性を持つてゐたのではないことも明らである。その勢力伸長は一にかゝつて、外交・財政面などを担当して能力のすぐれたらしい官僚貴族の性格にあつたことは、何人とも異を挟まぬ如であらう。されば氏姓制古代國家の國力が、発展すればするほど、機構が整備する程、彼の氏の力が上昇したことは当然である。そしてこの傾向は單に中央政局だけではなく、国造制の変遷ともむすびついて、地方政治勢力の面に於いても劇的に伸長したと見られる。即ち蘇我氏こそは最も新しき形の氏姓時代豪貴族だったのであり、飛鳥時代の氏姓國家が、律令的制衡進展の傾向を深めて

てゐたならゐた程、それだけ蘇我氏の勢力は強大だったのである。

註1、津田左右吉博士「大化改新の研究」で「大化改新は蘇我氏の滅亡を経なければできないことであつた。」と日本上代史の研究二九二頁と述べられた。

2、この様な立場で、しかる見方を集積された形の最近のものに、鶴岡静夫氏の「大化改新研究」に「日本正史一。八号」などがある。

3、拙稿「大化改新をめぐる二つの問題」に「秋大史学4号二八頁。

4、拙稿「大化改新と律令制の成立」に「新稿日本史一九頁

5、曾我部静雄博士「日中関係史上に於ける大化改新の地位」に「日本正史一。三号

6、村上光貞助教「大化改新」一七号

7、拙稿同4一八頁

二、反蘇我勢力の分析

蘇我氏が当代切つての大勢力であつて、書紀に

よれば、或ひは対外的に皇極天皇元年紀四月条「百濟の大使翹岐喚招・同年紀十月条」蝦夷庇苾、或ひは国内的に皇極元年紀正月即位条「以蘇我臣蝦夷爲大臣如故、大臣児入鹿更者難作自執國政、威勝於父、と記されたり、^同全く秋七月条には天皇のそれにも比すべき兩請ひの祈りをなし、二年十月条で蝦夷はその子入鹿らに即位を私授するなど、執政者たる最高官僚としての最大権力をふるふのである。勿論皇極天皇即位条の記述の様なことは、蘇我父子にかゝる当時の氏姓時代執政者として一面当然のことであるともいへるし、更に恐らく大伴・物部時代の太連達も決してこれに劣らぬ権力を行使してゐたであらうことも考へられはする。けれども冠位私授といふ様なことは、聖德太子の政治以前にはありもしなかつたことだつたし、この大權侵犯とも云へることからは、大伴・物部的な「天皇のもとにおける強大権力伸張」とは眞の異つた、反皇室の姿勢の顯然たるものであつた。それ故にこそ、本系外様の性格の保有さへも推察される旧くからの大勢力平群眞鳥さへも、武烈朝

に滅亡前の専横時（即位前紀）に殿舎を営む際に、「陽意太子宮官、丁郎自居」と記される様に、天皇の名に於いて行つた様なことでも、彼れ蘇我氏

に於いては、公然たる皇極元年紀十二月条の祖廟

・兩陵の築造となり、三年十一月の家門潛称となつて表記されるのである。そしてそれが昂じては

二年十一月の山背大兄王の襲葬となるのである。

それ故、二年二月の冬令の行事の大臣渡橋や三年

六月の大臣渡橋にあつて、「其要甚多、不可具聴」と表記される様に、國內巫祝らの阿つたとり

入りの神語の隠説が行はれ、四年大極殿の変事

の際の刺客佐伯子麻呂等は水飯を反吐し、使徒不進するの威光を待し得たのである。

彼の氏が世上に畏怖されるその大勢力を保有し

たことについては、かくのごとく全く疑ふべき如くないのであるから、その打倒はとても一氏・一

族の力を以てしては能ふ如くではない。こゝに

聯合勢力の存在が考へられねばならないが、改新

にあつて活躍した人々を拾ひ出すと、次の如く

になる。

改新の反蘇我勢力に先だつて、山背大兄王事件についてふれると、この時の兩勢力は書紀による次の如くである。

山背大兄王

妃・子弟

三輪文屋君

舍人田目連

菟田諸石

伊勢阿都堅經

小徳巨勢徳大臣

大仁土師婆婆連

これは大兄王の方は全く一族郎党であるのに対し、入鹿の方は正々とした官僚であつて、巨勢徳太

（能）の如きは後に蝦夷誅滅の際の中大兄皇子方の将軍である。こゝにも前項で詳論した蘇我氏の

最高官僚性が表出してゐるのである。

さて改新に於ける打倒蘇我勢力をこれも書紀に

よつて見ると、

甲賀 中大兄皇子

中臣鎌子連

輕皇子

蘇我倉山田石川麻呂臣

佐伯連子麻呂

葛木稚犬養連網田

海犬養連勝麻呂

乙群 巨勢徳陀臣

高向臣国押

丙群 阿倍内麻呂

沙門旻法師

高向史玄理

大伴長徳連

大上健部君

となる。甲群は入鹿討滅の謀議及び実行者であり、乙群は蝦夷服誅の際に漢直など蘇我勢力の反抗を制したものである。国押は山背大兄王事件に於いても、入鹿の誘ひを拒否して出陣しなかつた男である。丙群は大化新政府の陣容を爲した者と、孝徳即祚紀に侍立を伝えられる長徳と健部とである。最後の二人はむしろ才三势力的中立派かもしれない。

以上の勢力を分析してみると、①中大兄

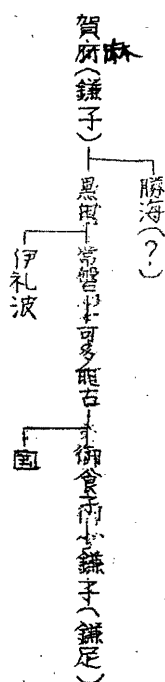
皇子と中臣鎌子といふ中心勢力、②蘇我石川麻呂の如き同調者、③佐伯子麻呂などの部下者といふ三者に分けることが出来るが、詳さに思へば④と⑤とは身分的上下はあらうと同質の勢力と云ふことも出来よう。従つて、①と、②及び③を一諸にしたものの、二者と見做すことが最も一般的であるとも云へる。しかし私はこゝにやゝ常見と異なる見解をとりたいのである。それは表面的には積極的中核者として行動上同一の表れ方をした中大兄皇子と中臣鎌子であつたが、実は法興寺樹下打越の會の相善説話で知られる様に、本来別個の反蘇我勢力として来たものが結合したものであつたことに注目せずには居れないこと、更に彼らが学んだ南洲靖安や、改新政府で蘇我石川麻呂らと共に、政府の中核を占める玄理・旻らの如き学識者たちの存在が見逃し得ない処であるといふこと、の二つが重要條件であると考へるからである。即ち私は、

①中大兄皇子を中心とする皇室勢力

②中臣鎌子等の勢力

三、中臣勢力の性格とその史的背景

中臣氏の系譜については、細部の異では勿論不明瞭な点もあつたが、疑問もあるが、現在普通に行はれてゐるのは次の如くである。



政治生活とをして、大化まで来たのかをふり返つて見ようと思ふ。蓋しその中にこそ鎌子の身うち
に凝集してゐる筈の「中臣氏のいのち」が顕現さ
れてゐると考えられるからである。

鎌子は大鏡の所述の如く常陸の生れとする伝へもあるが、先づその活躍ぶりからみて、「美氣古卿之長子」母は「大伴夫人」「大倭国高市郡人也」とする家伝の説あたりが、然るべき伝へなのであるまいかと思はれる。彼の人となりは、皇極三年紀正月条に「意氣高逸、容止難犯」とか、「爲人忠正、有匡濟心」とかと記される様な人物だったらうことも、ほど確かであらう。

この様な人物の彼は、やはり皇程三年紀正月条によれば、神祇伯就任を再三固辞したこと、後に孝徳天皇となる軽皇子と曾つてより親善関係にあつたこと、中大兄皇子と結びつくために、「槐樹之下打毬」の説話の如き行動があつたことなど、先づわかる。そしてそれは蘇我入麻呂（根）が君臣長幼之序を失つて、社稷をうかゞふ不逞心のあることを憤るのに発してゐるのであり、それ故にこそ蘇我

氏のもとに神祇の長官になることを快しとせず、またその擁立せんとする古人大兄皇子のライバルとも目すべき、蘇皇子や中大兄皇子と心を併せようとしたのである。

そしてひとたび中大兄皇子と結びつくことに成功するや、交際を他人が怪しむのを警戒して、南淵請安に入門し同学としての立場を獲得して、偽装しながら策謀をめぐらしたことや、蘇我氏の一族にして入鹿の従兄弟たる倉山田石川麻呂を謀議に引入れるためには、その女を皇子の妃となす政略婚の策を建て、蘇ちを実行したこと、実刀行使者としての佐伯子麻呂と種太養網田を勿に皇子に推薦して、着実に事の成る時機を計算し待ってゐたこと、やがて時到了て実行にうつす時には、刺客たちを嘖め助まして自ら弓矢を持ち助衛を爲す勇氣を持つてゐたこと、などなど、この改革の参謀長としての彼のあり方は、固然する所がなかったと云つても過言ではない。それなら彼のこの堅い立場は如何にして醸成され果つたのであらうか。私はそれを中臣家の歴史にもとめようと思ふ

のである。

鎌子の父弥気（御食子・美気古）は、舒明朝を通じて蘇我蝦夷のもとに安んじて居してゐたのである。大臣馬子襲い、推古天皇崩じての空位の間に於いて、父の後をついでゐた蝦夷は新天皇に敏達天皇の孫田村皇子を擁立しようとしてゐた。察する処當時の正論としては、山背大兄王の即位こそが最良策とされてゐた様であるから、自分の甥である大兄王を指いて、父は敏達天皇の皇子の彦人大兄皇子、母も今じ敏達皇女の糠手姫皇女といふ、直接的には血縁も無さうな田村皇子を擁立せんとしたのは、個人的關係に於いては皇子に擁立の意義を著せ、引いては、群臣の人望をあつめて衆議的政治を行ふであらう聡明な山背大兄王を、排除しよう云ふ国政上の企圖をなしたものであらう。そのために彼のとつた手段は、推古天皇の遺詔の勅旨によつて皇位継承者を決定するといふ、名分論の強調であつた。けれども舒明（田村皇子）即位前紀によると、この遺詔なるものは果して蝦夷の云ふ様な、田村皇子に旨があつたものなの

か、王自身が敢然主張した通りに山背大兄王を意中の後継者とされたものなのか、明らかではなく、前後関係よりすると、推古天皇が七十三才を以て臨終の床に留り皇子と山背大兄王との両君を擁ひよせられ、存らむべき者は一に推古天皇の御意にた意志表示がないまゝで、後事を託されたことに便乗した蝦夷の強弁だったのかもしれぬと疑ふことも、決して荒唐無稽の説ではない。だから群臣に對する大臣の詰問は、「留り皇子」と云ふ回答を期待したものであつても、「群臣望之無望、亦向之、非答」と云ふ非同調態度をとつたものであらうが、権勢無比の大臣の更に「強且内之」に到つては、遂に大伴鎌連が「進曰、既使天皇還命耳、更不可待群言」と答える状況が醸成された。そこで腹心の阿倍麻呂が「則向日、何謂也、府某意」と向ひたゞし、置勅旨を田村皇子論が展開されるのである。しかし入々は皆は同調をしなかつた。

許勢臣大麻呂、佐伯連東人、紀臣塩手三入進曰、
山背大兄王、是宜爲天皇。唯蘇我倉麻呂臣獨曰、

臣也、當時不得便宜、更思之後答、
といふ様な反対意見が出、蘇我の同族しかも馬子の弟たる、阿倍麻呂連勢さへも、山背大兄王擁立の節義に死ぬのである。かうした空氣の中で、しかりに蘇我の行動は如何であつたか、
采女臣麻呂志、高向臣守麻呂、中臣連蘇氣、難波吉士野刺麻呂曰、願大伴鎌言、更無異、
と云ふ記録に於ては明瞭である。

それ以後の事は全く蝦夷のもとに唯々諾々として、その政策の走狗たるにすぎなかつた。しかも不思議なことは、山背大兄王の言明によると、王が推古天皇の病床に就せ参じて門下に侍してゐるとき、華省から出て「天皇幸以願之」のは正に蘇氣ぞの入であつたのだから、何かいさ少し自主的行動をとり得べき資料を握つてゐるやうなものに思へるのに、何らの主体性も、動きの中に見出し得ない有様である。

かう見て来ると蘇氣に見られる中臣氏の在り方は、全く蘇我氏の追隨者たるにあつた様であるが、蘇氣自身家伝の云ふ如く、鎌子の母なる大伴夫人

を妻としてゐる以上、この際彼が大伴鯨にならつて蘇我氏のもとに止住することも、必ずしも通り一ぺんの弱腰攻惠のみで見過すことは許されぬとも考へられる。けれども、推古紀で十六年小野妹子と同行奉朝した隋使裴世清の掌客となつた同族^許中臣宮地連麻呂、廿年天皇の母たる皇太夫人堅塩媛の改葬に、馬子の代理として、大臣の詠をなした今いく中臣宮地連鳥摩侶、卅一年新羅征伐に蘇我一族の大徳境部臣雄摩侶と並んで大將軍となつた小徳中臣連固のごとき、何れも史上赤氣に先んじて同日に論すべき在り方をしてゐる。やはりこの対蘇我從属性が中臣一門の本性なのであらうか。もしさうだとしたら鎌子の叛骨は全く突然変異的なものなのだらうか、それとも先にも言及した大鏡説でも生かし考えて、中臣系常陸土裏の出であつて、この頃の都に住んだ中臣氏とは眞の異つた人士たりし故に、現れたことだったのでらうか。私はもう一度更に中臣家の歴史を調べてみようと思ふ。先づ馬子の代理の詠を読んで、時入に「能誅」と云はれて得々とした鳥摩侶から、書紀の

紀年で僅か四分ノ一世紀測^一ただけの用明二年紀四月条、時の大連物部守屋に興^二て新興の大臣蘇我馬子に對抗し、遂に彦人皇子訪向の帰途を暗殺された、中臣勝海連の存在を見出すことが出来る。彼は敏達十四年紀に見えることの如く、鞍馬の旗をかざして物部氏と矢に蘇我の叔方に反対し賣いて命を失つたのである。敏達十四年紀の原本によればこの時の守屋や三輪連と協力した中臣氏は、磐余連であるが、何れにしてもこの時代の中臣のあり方は一つである。更に我々はもう一步溯ると、仏法伝来の欽明朝に馬子の父大臣稻目と対立して激しい排仏を主張し実行した物部大連尾輿に同調して「拝蕃神、恐致國神之怒」と發論した中臣連鎌子へ以下鎌足の鎌子と區別するために賀麻と書く^三を見出すのである。勿論中臣は祭祀の氏とされてゐるのだから、彼が「敬神排佛」を主張するのは「生活上の實益から當然だ」と云つてしまへばそれまでである。けれども物部氏に与して新興の蘇我を敵にまはす中臣氏の姿には、單なる現實生活の利害關係だけではないものが見られるのであ

る。即ち彼のうちにある古さが明らかなのである。先に私が規定した大伴・物部の性格と云ふものを賀麻子も勝海もしっかり身につけてゐたのである。

かうした中臣氏の伝統も勝海の死につゞく、守屋の敗北と物部氏の滅亡によつて、その發揮すべき場を失つたのである。と云ふのは、賀麻子と勝海の血縁關係、磐余の血統、中臣官地連の中臣本家との關係地位などの重要問題さへも詳かになつてゐない様に、中臣氏は所詮三、四流以下の氏族にすぎなかつたので、その際によるべき物部と云ふ大樹を失つた以上、独力では旭日昇天の蘇我氏に對抗し得る筈のものでは無かつたからである。かゝる状況下で反抗者勝美などを出したあと、して中臣氏の生命を持続するためには、弥氣の迎合屈從もやむを得なかつたのではあるまいか。だがこれに對し、一応氏族の地位を守り通した後に入と成つた中臣氏の若主人、鎌子は、同じ世代の蘇我の若主人入鹿の独善に對し、一矢報いずに済ますことは出来かねたにちがいない。即ち公私両面からである。

こゝに公的な憤りと云ふのは、武烈天皇の即位前紀で、大臣平群眞鳥の専横に對し、消極的な大連物部麁鹿火や、祖父の大連守屋をのり越えて、「眞鳥賊可嘉請討之」と、敢然命令をうけてこの大旧族勢力を打倒した青年大伴金村のそれに似、そして叔勢並びなき一代の政治生活の末にも、任那問題で邦家のために策を誤つたと感ずるや、敢へて処置をうけるを待たず、一切を捨て、往吉の居宅に隱居し、「今諸臣等謂臣藏任那、故恐怖不朝」と云つた晩年の金村の振舞をさへへる心根に通ずるものがあつたであらう。またそして、私情に於いて存したものは、南明元年紀に穴穗部皇子の炊屋姫皇后強行赤坂事件後、その阻止に力のあつた三輪君逆を、皇子が物部守屋をして殺さしめた不祥事件で、馬子が讃歎して「天下之乱不久矣」と云つたのに對し、「汝小臣之所不識也」と一喝した守屋の、蘇我氏に代りきつた憎しみにひとしいものがあつたであらう。しかもそのやゝ粗暴にさへ見える守屋も天皇に對する旗本的忠誠

心は強かつたのであつて、馬子ほどの者も、さればこそ守屋亡びての後にはじめて崇峻天皇親逆のことが成就出来たのである。

彼れ鎌子はやはりそれでも金村・守屋と異ところもあつた。それは、武弁の兩人の極端な直情径行と比べては、その行動が深慮にうらづけられてゐたといふことである。彼の個人的生活と高い教養、及び、當時の中臣氏の社会的地位より来るところの一步控へ目な態度などが、さうした一處のつ、^あでもき出しにしない教養の原因だったのかもしれない。

右の様な鎌子に異情された一甲直氏のいのちには、既に見た如く藤原氏に屈服してゐたわけではない。群臣の、中臣と同盟の「諸氏のいのち」にも通ずるものである。だから鎌子に発願されたものものは、独り中臣の鎌子の氏族だけに限つてなされたものではなかつた。即ちしばらくは雌伏しておたが、鎌子の抬頭などを機縁として、同僚氏族の動向の底流の静れではあるがしかし根強く藤原つゝあつたことが、^ある當時の勢力が充分な強

力性を持ち得た理由だと思ふのである。このことは史籍にはあまり顯著に扱はれてゐないけれども、決して見落し得ない重要事だったのである。

註1、中臣宮地連藤原信とこの麻呂とは同一人か、と云ふのが佐伯有義氏「朝臣新開者六国史」の説である。中臣本系帳では^包佐藤連は根津を本拠とする同族であると云ふ。太田亮博士姓氏家系詳書

2、本系帳その他では勝海の血統的位置は明らかでないが、佐伯氏「前著」によれば習紀集解が賀麻子の子に比定するといふのを支持する如くであり、黒板藤英博士「鎌科国史概観」もこの見解をとつて居らる。

3、吾余の系も明らかでなく、佐伯氏も「系不詳」に「前著」にされるが、本系帳を見ると、黒田へ本文の略系参照の子に「伊礼波」がある。私考するに或ひはこれか。

四、華新主義者の成長

大化以前から中國の諸法則が入つて来てゐたこ

とについてはすでにのべた。そしてその様なことの基礎となつたものが南朝諸国など、の頻繁な交渉であつたことも曾て言及した通りである。しかしそれらの彼我の史料に顕著な交渉に於いては、まだ本格的に国政上の綜合制度の輸入は行はれなかつたのであり、また一方多数の要素が伝へられてゐる歸化人達も部分的には実務上に於いては、我が国政に貢献する処少くなかつたらうけれども、国政の根本制度についてまで介入する實力を持つてゐるなかつたのである。

如か^史其上に著明な外交上の一転機聖徳太子による遣隋使差遣のことは、これまでの外交とは本質的に異なる処のあるものであつた。確かに井上助教稔の云はれる様に、^註「この外交の転換の根底に横たはるものは、いろいろに考えられるが、一つには、既に五世紀の南朝との交渉に見られるような、シナ勢力と結ぶことによつて新羅を牽制するといふ政策を再びおそつたものといえよう。また永い蘇我氏の執政の期間、因襲と化した対鮮外交を打切る意図もあつたと考えられる」ものであらうが、

その結果招来されたものは、五世紀のそれとは全く別なものでつたのである。何故ならば五世紀までの未熟な氏族制古代国家日本と、氏族官僚制の極度に発達し、精神文化も文質文明も誇らかに輝ける飛鳥の時代を誇つた七世紀初めの日本とは、受容力も消化力も根底からちがつたスケールに立到つてゐたからである。さればこそ、客観的にはひとりよがりに見えようと、相手の煬帝が怒らうと、敢えて対等意識に充ち満ちた聖徳太子の国書も生れ、それと併行して、文化受容に拍車もかけられたのである。既に八年にも遣使があつたと伝えられる推古天皇の代、十五年七月小野臣妹子が通事の鞍作福利をしだがへて渡隋して以来、翌年客使裴世清を送る大使小野妹子・小使吉士雄成・通事福利にぞへて、早くも倭漢直福因・奈羅訳語恵明・高向漢人玄理・新漢人太田らの学生と新漢人日文・南淵漢人請安・志賀漢人慧隱・新漢人廣香らの學問僧が留学の途に上つたのである。

かくしてゐるうちに支那大陸では隋が亡び唐が中原を支ゐしたが、やがて我が国でも聖徳太子が

薨じた。太子薨後二年の推古三十一年秋、才一陣の帰国留学者福因等四名が新羅使と共に帰朝するのである。福因以外は渡海した年が詳でないが、福因は実に十五年間の留学を終えたわけである。

そしてその彼らは、留学者は皆学成つてゐるから、嘆び返すべきであることをのべて、更に、「大唐国者法式備定珍国也、常便達」と奏上したのである。この奏上こそ留学帰朝者達の魂の叫びであつた。しかも彼らが体験した中国の此の時代が、驕華を誇つた大唐隋が亡び、代つた若き大唐唐が榮えるといふ、国家興亡の動乱を越えて進んだ中国律令制古代國家の完成期であつたのだから、帰朝者が、單なる平和時の文弱書生の留学生とはちがつた、力強い筋金を身にうけて歸つたことは明らかである。彼らは唐朝の強力さと律令制の整然性などに、眞理に生きる学者的良心の熱意のすべてをかけて傾倒してゐたのである。

舒明天皇二年には、犬上君三田耜と大に栗師惠白が遣唐使として入唐した。歸る三田耜とそれを送る高表仁らと共に四年秋八月、僧旻他二名が歸

朝したのである。彼こそ改新政府の国博士となる旻なのである。暫くして十一年秋九月学阿僧惠隱外一名が、新羅送使と同行帰朝し、翌十二年冬十月には学阿僧諱安と学生高向玄理とが、三十三年の長き滞留を終へた大立物として帰朝したのである。十五年間の留学者さへもかあの叫びをあげたのである。ましてや三十三年と云ふ成人としての半生をば、その唐土で送つたこの入々の心は正にそれに救済した深く強いものであつたであらう。

以上帰朝者としてこゝにあげた入々は、舊紀に帰朝のことの明記されるものだけである。帰朝が明記されて居ながら渡海した時の不明なものもあるのだから、留学帰朝しながらも猶史上に名を留めぬ者も少くはあるまいし、またこれらは長い正式の留学生活もせずとも、外交使節や、随行員、閑豫者の中にも幾多の、先進文化にあこがれる人々があつたことであらう。

これらの人々の心の生み出すものこそが、本居宣長以来精神史家や思想史學者によつて強調されて来るところの隋唐的ロマンティズムとも名

づくべき思潮なのである。そして、この様な思潮が、往那失陥以来の国力増強主義と結びあつて、大きな革新運動に発展するのである。やがて尚もなく皇極朝で、中国皇帝にあたるべき天皇を、ないがしろにして専横する蘇我氏を見ては、彼らの目ざす処は次々に確定して来たを見てよいのである。註一、井上助教授前着一二三三頁

五、皇室勢力の動向

いはゞ自ら陣頭に立つて、巨勢・平群など外様の考へられると定義した廷臣をひきあてうちたて、それらの補弼によつた初期の大和朝廷政權での天皇は、皇位継承問題などで動揺することが多かったけれども、猫唯一最高の权威を以て国政に直接してゐたし、それは大伴・物部勢力の強い大連政治時代となつて、天皇の直接的政治関與が弱まつて来た状況下にもひきつがれて来た。ところがや一項で言及した通り、氏姓制度下に於ける官際政治が発達するにつれて、天皇の国政に対する直接接觸面が減少して来たのは自然である。

殊に欽明天皇の後にヤ二皇子敏達・ヤ四皇子用明・ヤ十二皇子崇峻と、兄弟三天皇が皇位継承するや、すでに敏達朝に父祖以来のさうした關係が一層悪化して来たところの、旧型豪族の大連物部守屋と新進官際貴族の大臣蘇我馬子との対立は、馬子の甥である用明天皇の即位によつて決定的に馬子の側に優利に展開して来た。つづいて穴穗部皇子を擁立する守屋に対し、やはり自分の甥になる崇峻天皇の擁立を心がけた馬子は、用明天皇の同母妹にして敏達天皇の皇后たりし後の推古天皇炊屋姫尊を旗印に使用して、群臣を幕下にひき入れることに成功し、穴穗部皇子を暗殺して崇峻天皇を擁立し、更に次の月には物部一族以外の皇族・豪族以下総力をひつさげて、守屋を攻め滅ぼしてしまふのである。かくて累代の高官蘇我氏による外戚専横は、天皇執政の無実化傾向を極点に到らしめてしまったのである。

守屋の滅亡にあたつて最後まで物部氏の難波の屋宅を守つて奮戦した資人捕鳥部萬の、死に臨み數百の捕亡兵を前にして「萬為天皇之捕、得効其

勇不推肉、饒致遠迫於此窮矣、可共語者未、願聞殺虜之際」と雄叫した、素朴な忠誠心な蘇我氏は全くなくなつてゐたのである。そのものに屈した群臣は、前述の如く格別それに心服してゐたとは思へぬが、利欲にはしる現実主義者の官僚からすれば、腰抜け氏ノ上共だけになつてゆき、ふるめかしい表現を以てすれば、正に「蘇我氏のあるを知つて天皇のあるを知らず」といふことになるのである。

しかし擁立された天皇自身といへども、さすがにその地位につかれて、国政一に馬子に出で、動くのを見ては、その尊横に堪へ難かつたのであらうか、五年十一月馬子は天皇が「恐嫌於己」、東漢直駒をして空前絶後とも云ふべき「天皇弑逆」の暴挙をなすのである。国内の動搖は新羅外征のことによせて難なきを得た馬子は、そこで遂に姪である推古天皇を擁立した。そして聖徳太子を皇太子摂政としたのである。けれども、太子もまた蘇我氏の血をうけて居られはしても、自ら然るべき位に就かれ、は、崇峻天皇が不満に思はれたと

全い様な事態の中に立たれることは自明である。況や史上に名高い太子の聡明を以てしては尚更のことである。

太子は成熟してまた氏姓古代官僚制の推移と見合せて、次から次に新しい手段を構じた。曰く冠位制定、曰く憲法十七条制定、曰く遣隋使差遣、曰く云々である。爰に繁雜な筆をもつするまでもなく、太子の新政についての研究は既に数多い。今は太子の政治方針が以上の様な「蘇我氏のもと」の氏姓古代官僚群を、天皇のもとに編成し直さうとするところにあつたと見る、私の結論的解釈だけを述べると共に、また、井上助教の「當時既に官司は整い、貴族群は官人化しつゝ、あつた。そして現に、氏姓の秩序を破つて、勞功を以て貴族を遇しようとする道は、前年の冠位制定で断ち切られているのではないか。かくて、憲法には、阿族によつて作り出されようとするヒエラルヒーに対抗して、皇室の地位を絶対化することや、門閥以外の官人群を羽翼とすることやが、換言すれば、皇室みずからによるヒエラルヒーの形成の意図がまこ

とにあきやかにみられるのである。」と云ふ文辭を引用しておこう。

幸か不幸か太子は中道にして夭折せられたから、太子の代にはその事態は起らなかつたけれども、皇室のこの方針と蘇我氏の意図との向には必然的な衝突を避け得なかつた。推古天皇の崩後に皇位継承にからんで起つた山背大兄王排斥事件がそれである。しかしこゝでも群臣も一部は才三頂でみた様な抵抗を行ひはしたものの、大勢に於いては蘇我氏の計画通りに舒明天皇の確立が成功し、皇室の方針は中絶した形のまゝに皇極朝を運へたのである。そこに於ける蘇我氏の動きは才三頂にみた通りである。血縁であらうと、場を裏にする上宮王家は蘇我氏の最も恐るべき相手であつた。爰に或ひは上宮大娘姫王を憤歎せしめ、或ひは遂に山背大兄王を隳滅してしまふのである。

中大兄皇子は聖徳太子の後継者山背大兄王と、蘇我氏の母を持ちその擁護にかゝる異母兄の古人大兄皇子とが、便宜的な女帝のもとで相對する蔭にかくれて、人目につかなかつた如くであるが、

山背大兄王の滅後はそのあこに立つものとして脚光を浴びて来たのである。かゝる史的推移をうけた皇室のチャンピオンたる皇子の憤りは、その勇氣と才能、それに時代と共に移つて来てゐた反蘇我勢力と結びついて、遂に一大クーデターを断行することになったのである。

註一、井上助教『前著』一二六頁

終りに

反蘇我勢力の構造は如何になつてゐたか。そしてその各勢力はどの様な歴史のもとに成長して来て、どの様な性格を持つものであつたか。不充分ではあり、細密の点では問題も残るが、概要に於いてはその本筋を明らかにし得たと考へる。

如上革新断行にあたり反蘇我の一点に凝集された各自勢力のそれぞれ性格差こそが、やがて、対立すべき「蘇我勢力」の懐滅した改新成立後に於いて、必ずしも完全な結合をなし続け得ずに、分裂的傾向を来す最大の原因である。そしてそれが改新政治そのものの、歩む方向や歩調・速度について極めて大きな影響を与へずには置かなか

ったのである。

(昭和三十八・廿五)